



”紙媒体の薄くて 軽い”が確かな誇り

山田五郎

街を歩いてても、「誰だっけ、ほらテレビに出てる変な髪形の人」と、たまに囁かれる程度の認知度しかない私だが、さらに知られていないことには、昨年までの23年間は出版社に勤め、今なお教誌に雑文を寄せていたりする。つまり、広告業界という「紙媒体の人」なのである。

ひがみかもしれないが、この「紙媒体」、どうも件の業界では不当に軽んじられがちだ。雑誌の10万部はテレビ視聴率の1%にも相当しないとわれ、広告料金も(ついでにいえば原稿料も)桁違いに安く算定されている。

だが、そんな「紙媒体」にも、「電波媒体」の皆さんから羨ましがられる点がひとつある。「形として残る」というこ

とだ。それ自体は目にも見え、録画しなければ消えてしまふ電波と違い、紙という実体は、燃えたり虫に食われたりしないかぎり何百年も後まで残る。

実体ならではの存在感は、信頼性に直結する。その証拠に、パソコンの普及がペーパーレス社会をもたらすといわれて久しいが、紙の消費量は逆に増えているではないか。大切な情報は、目に見えて手で触れられる媒体に記録しないと安心できない。これは単なる過渡期的な現象ではなく、人間が肉体を持つ実体である以上、永遠に変わらない真理だろう。

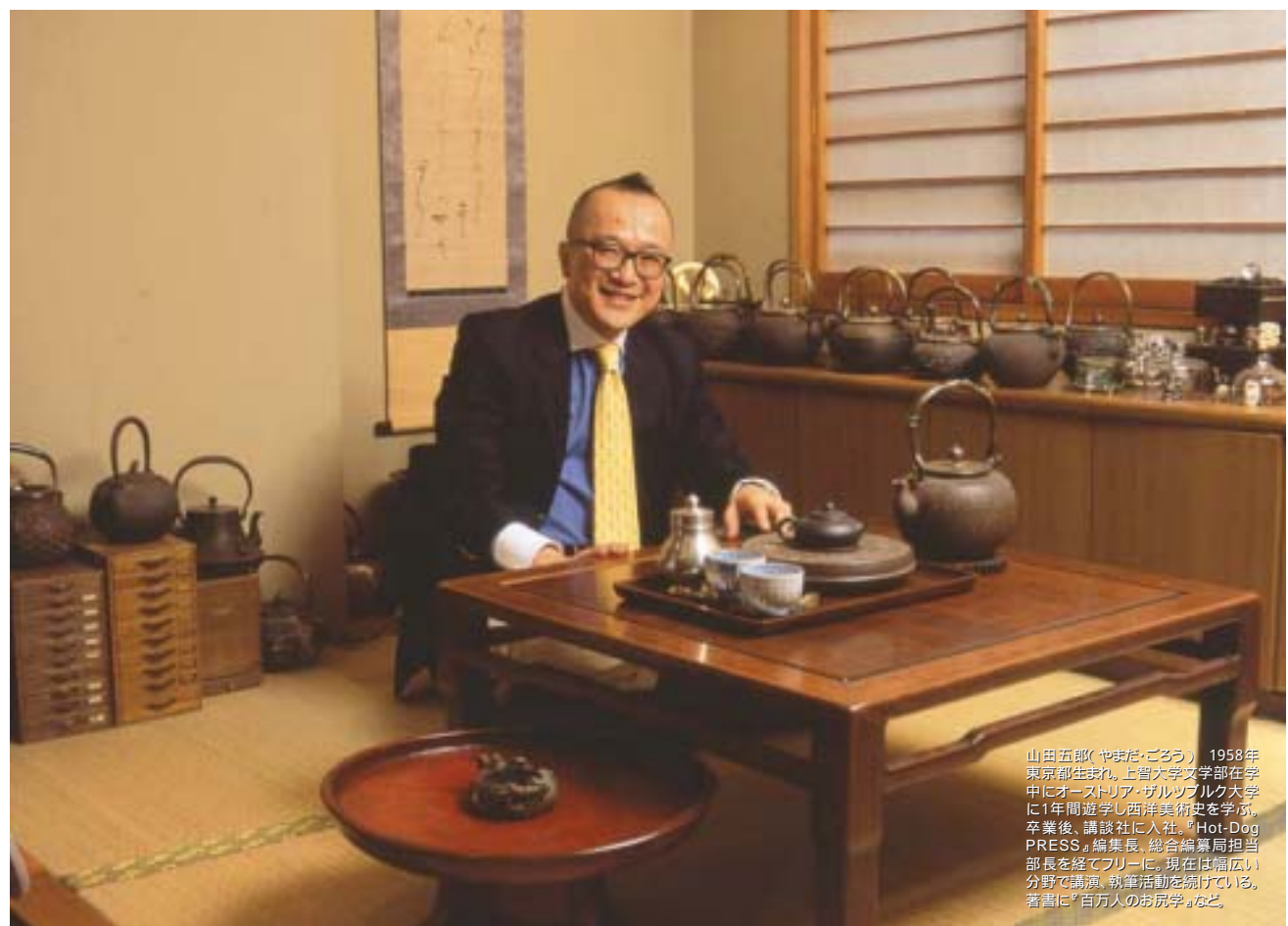
さらに、手触りや光沢といった物理的な質感の違いを楽しむのも、実体を持つ紙だからこそ。同じ小説を読むのでも、手書き紙に刷られた特装本と文庫版では、おのずと味わいが違ってくる。どちらを選ぶかは好みの問題だが、いずれも手触りのないパソコンの画面では味わえない豊かな体験を提供してくれる点では遜色がない。世の中には「同じ文章ならば読んで読んでもパソコンで読んでも情報としては変わらない」という人もいるようだが、それは「同じコンドロイチンならフカヒレ・スープでもサメ軟骨エキス錠剤でも栄養素としては変わらない」というのと同じで、理屈は正しいかもしれない

が、気持ちはずいぶん。

映画、テレビ、パソコンと、新しいメディアが登場するたびに危機が叫ばれてきた「紙媒体」だが、いまだなくなる気配はないし、今後もなくならないだろう。インターネットの普及で本が売れなくなつたというが、それは情報の中身で負けた結果であつて、媒体としての紙がパソコンに劣つていたわけではない。私がいくら雑誌にコラムを書いて「テレビに出てくる人」としか呼んでもらえないのも、文章に魅力がないからだ。

薄くて軽い確かな手触りを持つ紙は、人類が生んだ最高の(なのに広告料金と原稿料は最低の)メディアであり、その「豊かさ」は他媒体の「便利さ」と引き換えに出来るものではない。

私はこれからも「紙媒体の人」として、薄くて軽い確かな誇りを胸に、「文章を書く人」と呼んでもらえるよう精進していつか思う。



山田五郎(やまだごろう) 1958年東京都生まれ。上智大学文学部在学中にオーストリア・ザルツブルク大学に1年間遊学し西洋美術史を学ぶ。卒業後、講談社に入社。『Hot-Dog PRESS』編集長、総合編集局担当部長を経てフリーに。現在は幅広い分野で講演、執筆活動を続けている。著書に『百万人のお尻学』など。

Let's think together! 地球温暖化を防ぐ私たちの小さな一歩

さらに高い目標への挑戦、紙パルプ産業は始めています。

太陽からの熱を吸収するCO₂などの温室効果ガスが増え続けると気温が上昇。21世紀末までの間に1.4~5.8度も上昇すると予想されています。気温が上がると、世界的な干ばつ、台風などによる風水害、海面の上昇などが起こり、人間はもちろん、動植物や農作物への影響も計り知れないものがあります。大切な地球を守るために何ができる



のか……。私たち紙パルプ産業では、永年にわたりCO₂を排出する化石燃料の使用を減らす努力を続けてきました。そしてより効果を上げるために、目標をさらに高く設定し、新たなチャレンジを始めています。また、紙の原料となる木を植えることはCO₂を木の中に固定することに役立ちます。紙パルプ産業だからできること、それを確実に実践していきます。

*出典:IPCC(Intergovernmental Panel on Climate Change: 気候変動に関する政府間パネル)の第3次評価報告書



次回は8月4日号、石原良純さんです。